

進化

震災からの復興と

あれから5年——

順調に観覧者数を伸ばす田んぼアート——
さらに次の展開へと進んでいます。



昨年の稲刈り祭りで作った3D田んぼアート

次元を、超える

田んぼアートの見頃も過ぎ、稲も黄金色になる10月。文字と絵柄を残し、周りを刈り取ることで文字と絵柄が浮かび上がって見える「3D田んぼアート」に挑戦しました。2Dから3Dへ、楽しみ方の幅も広がっています。

「観る」だけでなく、食べる

田んぼアートで採れた「天のつぶ」は田んぼアート米として、また、米粉に加工して米粉パンとして小中学校の給食で振る舞われました。その他、米粉は「かしわ餅」などに应用され、米粉パンは商品化もされるなど、様々な活用がされており、今後も新たな展開が期待されます。



①学校給食で米粉パンを食べる町立第二小学校の児童たち
②町内のパン屋さんで商品化された米粉パン
③親子で「かしわ餅」作りを行った親子クッキング教室

「体験」し、肌で感じる



⑤鏡石保育所、⑥鏡石幼稚園での田植え体験の様子

町内の幼稚園・保育所では、田んぼアートで使われている苗を使用して田植え体験が行われています。園児たちは泥の感触に最初はとまどいながらも、田植えを楽しみました。普段自分たちが食べているお米がどのように作られるのかを学ぶことで、食育にも繋がっています。



◀オープニングセレモニーでのテープカットの様子

6月14日(火)、観覧場所である町図書館の4階で、一般観覧の「オープニングセレモニー」が行われました。植えられた田んぼアートは稲の成長にあわせて徐々に鮮明になっていき、7月中旬に見頃を迎えます。昨年2万人を超えた来場者は今年何人になるのか、今年はどうのよう新たな展開を見せてくれるのか、とても楽しみです。鏡石町の「田んぼアート」は、まだまだ「進化」し続けます。

震災の年にスタートする予定だった「田んぼアート」は延期を余儀なくされました。1年後ようやく開始された田んぼアート事業は、現在は鏡石町の福幸(復興)のシンボルとして町内外の多くの方々に親しまれています。

震災により作付できず

平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、隣村・天栄村の羽鳥ダム及び幹線水路全長約18kmのうち、約3kmが被災し平成23年は通水できませんでした。羽鳥用水の被災により、平成23年は町内の8割以上もの水田が作付不能となり、予定されていた「田んぼアート」も断念せざるを得ませんでした。

復旧工事は1年かけて行われ、平成24年5月によりよく通水が再会され、田んぼアートも1年越しに実施することが出来ました。

田んぼアートの初年度は、

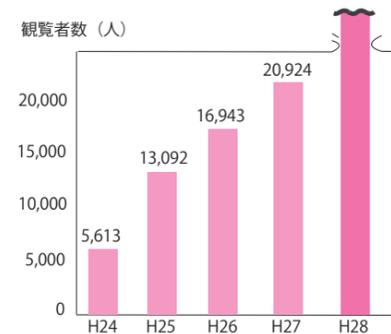
窓から眺める絵本 〜もう一つの図書館〜



◀図書館の窓から眺める子ども達

唱歌「牧場の朝」のモデルとなった岩瀬牧場の「牧場の風景」。2年目は鬼退治に向かう「桃太郎」。3年目はワールドカップの年ということ、サッカーをする「金太郎」。4年目となる昨年は、町の公式キャラクター「牧場のあーさー」が乙姫に扮した「浦島太郎」でした。そして5年目の今年は、月に帰る「かぐや姫」となりました。

鏡石町の施設で一番高いのが町の図書館です。その図書館の4階から眺める「田んぼアート」は、まさに「窓から眺める絵本」のようです。



◀田んぼアート観覧者数の推移
今年は何人になるか楽しみます！

初年度に5,613人だった観覧者数は、年々その数を伸ばし、4年目の昨年は2万人を達成し、最終的には20,924人となりました。

町内はもちろん、遠方から訪れる方も多く、昨年度は8割を超える80.9%が町外から、8.8%が県外からの観覧者でした。なんと、国境を越え、海外からの観覧者もいらっしゃいました。

観覧者数2万人達成

INTERVIEW

関係者の努力の集大成——

また、田んぼアート制作までの取組はもちろんですが、その後の取組として、観覧者へのおもてなしのために期間限定の「田んぼカフェ」も行い、観覧者の憩いの場となっています。関係団体に順番で運営にご協力いただいております。色合いと絵柄の鮮明さの変化を毎月見るのも感動的です。みんなで作りあげた田んぼアートをぜひご覧ください。

震災の年、動き出していた田んぼアート事業は、絵柄が決まり、さあとりかろうかという時に、中止となってしまいました。1年越しでスタートし、現在は多くの方にご覧いただき、とても嬉しく思っています。

田んぼアートで採れたお米は、あらかじめ収穫した部分を稲刈りイベントでおにぎりとして提供したり、学校給食や米粉パンとして商品化されるなど、地産地消や農業の6次化にも繋がっています。



田んぼアート実行委員会
副実行委員長
和田和久さん